

1. 実施概要

(1) 日時：平成24年11月9日（金） 13:30～15:30

(2) 場所：アオーレ長岡市民交流ホールA

(3) テーマ：「市役所機能のまちなか回帰と中心市街地の活性化」

～市民協働と交流の新しい拠点づくり アオーレ長岡の誕生～

(4) 進行

13:30～13:35 開会

・開会の挨拶 長岡市長 森 民夫

13:35～14:15 基調講演

・長岡技術科学大学副学長 中出 文平

14:15～14:25 国からの施策紹介

・内閣府地域活性化推進室次長 横山 典弘

14:25～14:55 事例紹介

・長岡市長 森 民夫

・都市再生機構理事 松田 秀夫

14:55～15:00 (休憩)

15:00～15:30 パネルディスカッション

・コーディネーター：中出 文平

・パネリスト：建築家・アオーレ長岡設計者 隈 研吾、
松田秀夫、森 民夫

15:30 閉会

2. 開会の挨拶

- このアオーレ長岡もおかげさまでたいへん話題となっており、全国から毎週のように見学の方が来られている。このアオーレ長岡のコンセプト、またそれに限らず、長岡市がここ10年ほど取り組んできた中心市街地の構造改革をぜひ知っていただきたいという思いがある。そういう意味で良い機会をいただいた。内閣府の皆さま、またパネルディスカッション等にご参加いただく方々に心から御礼を申し上げたい。



3. 基調講演

《市役所機能のまちなか回帰とコンパクトなまちづくり》長岡技術科学大学副学長 中出 文平

- 長岡市はこれまで拡大志向だった。平成8年策定の第二次新長岡発展計画では平成7年の人口約19万人に対して目標とする将来人口を25～30万人に設定し、大きな夢を持って魅力あるまちづくりを進めていくと謳った。平成11年の旧中心市街地活性化基本計画でも拡大志向は止められなかったが、13年の国鉄操車場跡



地をどう有効利用するかという計画においてようやく中心地における整備が始まり、17年の長岡防災シビックコア地区整備につながっている。

- 平成15年には「まちなか活性課」が新設され、中心市街地構造改革会議が立ちあげられた。それでまとめられた提言が、郊外化による多極分散から中心市街地への再集積を図り、市民にとって必要な機能を中心市街地に集積させることが長岡広域圏全体の活性化につながるというものだ。商業はワンオブゼムとして、「まちなか型公共サービス」という概念を打ち出した。
- 平成16年の中越大震災のあと、18年には都市再生整備計画が採択され、まちなか型公共サービスを展開。21世紀型シティホール、まなびと交流、子育て、アクセス性の向上といった内容で進められた。そういう中つくられた長岡市総合計画では、少子高齢化を受けて人口の減少を前提にしたものとなった。拡大傾向から転換し、コンパクトな都市を都市づくりの目標とした。これは単に小さくするというのではなく、中身を濃くするということだ。
- 将来都市像の実現に向けた都市づくりのポイントとしては、(1)「都心地区」及び「地域の中心部」を形成し、相互を円滑で便利な幹線道路及び公共交通網で結ぶ。(2)市街地を適正な規模にとどめ、既成市街地を有効活用する。(3)環境への負荷を軽減するとともに、市民が安全に安心して暮らせる生活空間をつくる。という3つを設定した。その後、21世紀の市民協働型シティホールが様々な機能を持った魅力的な空間としてオープンに至った。このようにアオーレができるまで様々な考え方、長岡市が苦勞してきた流れについてご紹介させていただいた。

4. 国からの施策紹介

- 最初は商業の観点から大型店舗の出店規制をやっていた。それが昭和49年から平成12年に大店法が廃止されるまで続いていた。それに合わせて中心市街地活性化法という旧法ができ、まちづくり3法という形でスタートしたのが第二期。その後内閣府の認定制度が出来たり、まちなか居住という新しい施策が盛り込まれた。中心市街地活性化法を大きく変えるとともに都市計画法で規制強化ができるようになった。
- これまで107の市で認定がなされ、北九州市のように2つの計画が認定を受けているところもある。7月の再生戦略でも中心市街地活性化等に向けた現行施策の検証を行うこととしている。そこでリレーシンポジウムのお声掛けをしたら、全国21の自治体からやりたいとのことまで有難く思っている。
- 内閣府の施策のうち構造改革特区では規制改革について誰でも提案できるというもの。経済産業省では魅力の掘り起こしをするとともに先導的で収益性の低い事業を支援していくというもの。国交省では、特にまちなか居住の推進策というものが盛り込まれている。総務省では、ソフト事業、ハード事業に対して各種の支援措置がある。最後に、リレーシンポジウムの際にこういう考え方を示したらどうかということでまとめたものがあるのでご検討いただければと思う。



5. 事例紹介

(1) 《シティホールプラザ アオーレ長岡の誕生》長岡市長 森 民夫

- アオーレには、「会おうよ」、ここでみんな集まって会おうよという意味が込められている。私はここで、シティホールという言葉を使いたかった。それは日本語の市役所というイメージではなく、英語のように“市民が使う場所”という意味合いだ。以前あったデパートを長岡市民センターとして活用したのがそもそもの始まりだ。とにかくまちなかに溶け込んで市民にどう愛される市役所になるかということが一番の思いだった。
- 市民センターには、住民票などの窓口、いろんなイベントができるイベント広場、さらに留学生と中高生が交流するイメー



ジで国際交流センターがあり、4階は全て子供の遊び場にした。また、保育所や子育て相談を一緒に行える場所にした。非常に人気が出た。この子育て広場は郊外にも定着している。市民に愛される場所とは、市民が誇りを持てるような場所にしようということ。

- 市民センターでの経験を踏まえ、アオーレ長岡をはじめとする再開発では、行政機能をわざわざまちなかに分散させて、市役所機能は一部にして、市民が使うスペースを渾然一体にしたというところに特徴がある。アオーレのナカドマを中心に、まちが市民のハレの場になるというのが最大の目的だ。良い場所があって自由に使えるのであれば、いろんなイベントを実施したいという市民がたくさんいらっしゃる。アリーナでビアホールをやるといっただけで人がいっせいに集まってきた。3Dシアターもあるが、これも長岡市のシティプロモーションという考え方で無料で長岡花火の立体映像が見られる。
- 簡単に言うと、市役所機能の分散配置を意図的にやったということ。不便になったといわれたら困るわけで、この総合窓口では、市民が必要な市役所の窓口機能を全部1階に集約した。私が一番気に入っているのは、3階のガラス張りになっているテラスで、幼稚園や小学校の低学年の児童が親子でお弁当を広げたりしていること。市役所でお弁当を広げるなどは全国でもないと思う。こういったことが市民に愛されるということで、非常にうれしく思っている。

(2) ≪UR都市機構の中心市街地活性化に係る取組み≫都市再生機構理事 松田 秀夫

- まずURの業務内容だが、民間や地公公共団体と行う「都市再生」、全国約76万戸の管理運営をする「賃貸住宅」、更に「災害復興」や「ニュータウン」という業務がある。まちづくりにおいては、専門家集団として構想・計画段階から実際の事業までを行っている。長岡市との関わりでは、市民協働型シティホールの設計コンペなど一連の支援を行っている。
- 東日本大震災復興における各公共団体は、ある意味今の地方都市に重なるように思われる。つまり復興しようと思っても技術者がいない、人材がいない、あるいはまちづくりの経験がないという状況が被災地にもみられる。URでも現地に213名を派遣して3県18市町村で復興事業、災害公営住宅の建設を行っているところだ。
- 中心市街地活性化の取組み事例としては、まず、静岡県藤枝市がある。民間事業者によるB i V i 藤枝の整備をし、立地に関する支援を実施した。また、藤枝駅北口についての再開発事業も総合的に支援した。もう一つは福岡県飯塚市で、最近起きた火災を契機にまちづくりを進めようということになった。飯塚本町東地区を3つのゾーンに分けて整備を推進しているところだ。さらに茨城県ひたちなか市では、身の丈再開発という形で勝田駅東口の事業をURが受託して行った。
- これからの中心市街地のまちづくりを実現するために、公共公益施設の導入、まちなかでの住宅整備、市民の活動・交流空間の整備、まちの持ち味を活かしたまちづくりの推進、更に安全に移動できる交通手段の整備などが挙げられる。URも



引き続きお手伝いをしていきたい。

6. パネルディスカッションの概要

- (コーディネーター) まず最初に、アオーレ長岡を設計されたその思いなどをお聞かせいただければと思う。
- (隈氏) コンペの要綱等を見ていて、本気で新しいことをしようとしているコンペと感じた。広場を中心に市民を呼び込むという、つまり市役所のコンペではないんだという点。逆転の発想が行間から染み出ていた。建築的には、温かみのある木や土間と同じ土を使った床だとかきめ細かい材料を真ん中に集中させた。また屋根にも木を使い、木漏れ日効果を出した。市役所以外の機能がその周りにちらばっているから楽しさにつながった。そういう発想の勝利だと思う。
- (長岡市長) コンセプトに対して、隈さんの自由を損なってはいけないと思い、私は一切口出しをしなかった。ある時間になるといつもお見えになるご婦人がいて、「ここは気持ちがいいから」とおっしゃる。晴れていると3階のテラスに木漏れ日のような光が入ってくるし、設計の考え方がすごいと思う。もうひとつ市役所の機能とアリーナや市民交流センターなど市民の施設との境界が分からないような、複合空間になっている。これは普通の建物ではない。いい言葉があればその言葉を発明したいくらいの新しいコンセプトだと思う。「アオーレ型公共建築」という言葉がふさわしい。
- (コーディネーター) 色々まちづくりの経験をされているなかで、このアオーレ長岡や長岡市の取組みについての印象をお聞かせいただければ。
- (松田理事) 私は静岡市役所に出向していたことがあり、駅周辺の再開発事業も盛んにやっていた。ただいずれも公共施設が建物の中で閉じていて、集客力はあるがまちとの有機的な関係では十分ではなかったのかなと。今回のアオーレ長岡は、まちに開かれている施設だなと強く感じ、やはり作り方が凄く大事で、一つの良い事例を示したのかなと思う。市役所と市民の活動が一体的にできる空間は他の都市の参考になると感じた。
- (コーディネーター) 長岡市が考えたのは、普通は縦に積んで一つの建物に収めようとするが、長岡市は大手通りに横に倒して機能をそこに配置し、横に回遊する人の動きが自然とまちの活気につながるだろうということを考えて実現したのだと思う。
- (隈氏) この中心市街地活性化の問題は世界的に悩んでいる問題で、意外にうまくいっているところが少ない。市民の生活に対する眼差しが柔軟じゃないとうまくいかない。先程のスライドで子育て施設とかデパートの中にいろんなものがあるが、ああいう眼差しがあってその延長線があるからうまくいったと思う。突然そういう施設をつくったのではなく、持続的な市民に対する目線の近いところで生活を見ているところがあり、それと大きな施設が一体となっとうまくいっているというのは世界的にも成功例なのではないか。



- (コーディネーター) 長岡市は平成の大合併で11の市町村が合併し、新しい長岡市になった。この中心部に11の市役所機能を1カ所に持ってくるのではなく、分散配置させて新しいまちづくりをスタートさせた。市民が主役であり、心のよりどころのスタートラインのオーレ長岡ができた。こういう箱モノのハードな整備ももちろん必要だが、これらをどう使うかというソフトの部分も大事。ぜひ市民の皆さんもこのハードとうまく使うソフトを展開して、長岡全体が盛り上がるようにしていただければと思う。

7. 閉会